
鏡の国のデートコース

月夜見幾望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡の国のデートコース

【Nコード】

N8841T

【作者名】

月夜見幾望

【あらすじ】

あらゆる世界に現れてはその風景を自らの鏡面に写し取り”記憶”として蓄積するという<世界を流離う鏡>。シルフィリアの目の前に現れた鏡は彼女に語りかける。「もしも貴女が望むなら、我が記憶の中にご招待」かくして地球へとやってきたアリエスとシルフィリアの一日限りのデートが始まった。なお、この作品は「ルーラーの館」にて掲載されている『リ・スペリオル』の二次創作作品です。

いざ鏡の国へ

<不思議な、不思議な鏡の噂>

いいかい、いいかい。

よくお聞きなさいな、そこのお嬢さん。

我は鏡。我は扉。

気まぐれに現れ、気まぐれに消える者。

一つの所に留まることなく、その目であらゆる世界を見て回る。

写し取った世界の断片、我が記憶にしっかり留め

未知なる世界を渡り歩く。

さてさて、お嬢さん。

ここで会ったのも何かのご縁。

もしも、貴女が望むなら

我が記憶の中へご招待。

けれど、けして忘れてはいけないよ

自分の本来いるべき場所^{ところ}。

そこで積み上げた思い出を。

出かける準備は整ったかね。

では、我が記憶にお入りなさい。

一日限りの良い旅を。

アリエスは奇妙な感覚を覚えて目を覚ました。

右も左も上も下も、すべてが青と銀に染まった不思議な空間。流星のように美しい尾を引いて、アリエスの傍らを高速で飛翔してい

く光の粒は、この空間がある特定の方向に向かってある種の“流れ”みたいなものを形成していることを示していた。

どこに向かっているのだろう。そんな疑問がふと脳裏を過ったが、すぐにそれは新しい感情によって上書きされた。

——きれいだ……。

光の奔流は、アリエスの覚醒に気付いたのか、まるで意志ある生き物のようにアリエスの周囲をどび跳ねたり、回転したりし始めた。その様子は、あたかもアリエスに笑いかけているようで、見知らぬ場所に警戒していたアリエスの不安や緊張を優しく取り除いてくれた。

アリエスはその粒の一つにそっと触れてみた。熱いとも冷たいとも分からない、けれど何故か懐かしい感じのする柔らかさ。光の導き手たちは、大人数で盛大な祭を催しているかのように、くるくると踊り続ける。

——海の中みたいだ。

と、アリエスは思った。しかし、その意識も少しずつ遠ざかっていき、深い闇の底へと落ちて行った……。

次にアリエスの意識が戻ると、そこは見知らぬ都市だった。首を真上に傾けないといけないような高層のビル群。それらによって複雑な形に切り取られた空は小さく、まるで古井戸の底にいるような感覚になる。上へ上へと天に向かって延びる分厚い入道雲が漂う空から視線を地上に転じると、多くの車や人が行き交う大広場だった。犬の形をした銅像。携帯電話を片手に忙しなく道路を横切るサラリーマン。ファーストフード店から出てきた女子高生のグループは、今時のファッションについて熱く議論を交わしていた。

駅前でティッシュ配りのバイトをしている子。家電量販店の入り口で、最新型の携帯機器について大宣伝している若者——各々の行動はバラバラだが、集団全体の視点から見ればある程度の秩序は存在しているようだった。

「どこだ、ここは……。何で、俺こんな所にいるんだよ……」

アリエスは努めて冷静に昨日の出来事を頭の中で復習し始めた。

ええと、昨日は確か夜遅くにレウルーラに戻り、『アリエス様……お風呂と一緒にいかがですか？ 見たところだいぶお疲れのようですから、よろしければ私が背中を流してさしあげますよ？』と、トンデモナイ提案をしてくるシルフィーに『……い、いえ、結構です！……！ 俺一人で入るからっ！』と、自分の理性を守るために頑なに断ったのを覚えている。

ちなみに断った際、シルフィーがすごく残念そうな表情をしていたので『やっぱり、一緒に入ろうかな……』と思い直したなんてことは、神様に誓っても絶対にないということを強調しておく。

そんなこんなで風呂から上がったときには、もう午後十一時を回ってしまっていた。それからすぐにベッドに潜り込み、ものの数分もしない内に眠りについたのだが……

「……そうだ。俺は海の底みたいな空間に呑みこまれて……」

夢とも現実とも区別がつかない、不確かな揺らめき。幾多もの光が溶け合い、一つの出口を目指して進む青銀色のトンネル。そこに善や悪といった概念はなく、ただ“繋げ合う”ためだけに存在している架け橋のようだった。

アリエスはふと自分の服装が、いつもの寝間着ではなく、この異世界に違和感のないカジュアルなものになっていることに気が付いた。

「???」

アリエスの疑問は深まるばかりだ。しかし、都市の喧騒はなにも答えてはくれない。

この見知らぬ土地で独りぼっち。大抵のことでは挫けないアリエスでも、これはさすがに精神にくるものがあつた。

そして、追い詰められたアリエスの脳裏に浮かんだものは、一人の美しい少女——シルフィリアーティカルターフェルトマリアの姿だった。

ちょうど大通りを行き来する人々と同じような、東洋系を思わせる黒髪と黒い瞳の自分とは対照的に、まるで天使のような美貌と艶やかなセラミックホワイトの髪を持ち主。大きな瞳はサファイアを思わせるブルーの輝きを湛え、肌は柔らかい処女雪のように白さ。本当に人なのか疑いたくなるほど可憐な彼女とは元は殺し合った仲だが、今では恋人同士の関係にある。

——しかし、彼女は、いない。

「何がどうなってるんだよ、くそっ！」

心の中でもやもやとする苛立ちを向けるべき対象さえいない状況に、アリエスが唇を噛んだその時——

トントン、と誰かに右肩を叩かれた。

咄嗟にそちらに振り向こうとしたら、

「うわっ！」

なにか冷たいものを頬に押し当てられた。そして、そこには……

「シルフィー!!!」

両手に飲み物を持ったシルフィーが、にこにこしながら立っていた。

「はい。誠に失礼ながら、遠くからアリエス様が慌てる様子を眺めさせていただきました……。アリエス様って、けっこう可愛いくところがありなのですね……。まるで道に迷った仔猫のような愛らしさでしたよ?」

「うっ……」

知らない大都会で俺がどういう反応をするのかを、シルフィーは影でこっそり見ていたのか!

ああああああ!!

こんなちっぽけなこと慌てふためくという、かつこ悪くて情けない姿をシルフィーに見られたと思うと、顔から火が出るほど恥ずかしくなった。もう穴があったら入りたい……。

シルフィーはそんな俺を見つめて、くすくす笑いながら、

「アリエス様……。心配なさらなくても、そんなことで嫌いになっ

たりしませんよ？　むしろ守ってあげたくなるような……」

「シルフィー……お願いだからもう許してください……。それ以上言われたら俺もう生きていけないかも……」

そう言いつつも、内心ではほっとしていた。アリエスにとって、シルフィーと会えなくなってしまうことの方がよっぽど打撃が大きかったのだ。少なくとも、いま彼女は目の前にいて、いつもと変わらない笑顔を自分に向けてくれている。それだけで、さっきまでのもやもやはどこかに消えてしまっていた。

「それはそうと、シルフィー、その飲み物は？　いや、それ以前にここはどこ？」

「アリエス様……。混乱するのも分かりますが、ひとまずこれでも飲んで気分を落ちつけてはいかがですか」

そう言って、手に持っていた缶ジュースをアリエスに寄越した。そのラベルには大きく『日本のサ○ダー』と書かれている。試しに軽く振ってみると、中から微かにシュワァアという音が聞こえた。どうやら炭酸飲料らしい。

シルフィーは近くのベンチの腰かけ、自分の缶をカシユツと開けると、

「アリエス様は“世界を流離う鏡”の噂をご存じですか？」

「世界を流離う鏡……？　いや、聞いたことないけど……」

「アリエス様がご存じなくても別に不思議ではありません。これは噂の出所も、語り継いだ人々も、すべてが不透明なのですから……。数百年に一度、唐突に一枚の大きな鏡が世界のどこかに現れ、鏡に認められた者だけがその記憶の中に入ることを許されると伝えられています」

「記憶……？」

「はい……。その鏡は世界と世界を彷徨う物……。自らの鏡面に写し取った情景を“記憶”として留め、必要となればそれを解放する……。でも、それはとても危険を伴うことでもあります」

シルフィーは一旦言葉を切って缶の中のジュースを、んくんく、

と飲んだ。それに合わせて彼女の細い首も規則正しく動く。この街の蒸し返るような熱気のせいか、喉が渴いていたアリエスも持っていた缶をカシュッと開けた。

途端――

プシュワアアア!!

と、中身の炭酸飲料が勢いよく飛び出した。どうやら、さっき軽く振ってしまったのが問題らしい。成す術も無く、アリエスの顔面に盛大にかかったジュースを、シルフィーはふわりとしたスカートから取り出した水玉模様のハンカチで拭こうとする。

「い、いいよ! シルフィー! 自分で拭くから!」

なぜか逃げようとするアリエスをシルフィーは不思議そうに見つめた。

「どうしてですか? 男の子ってこういうことされるの好きだと思っっていましたけど……」

「い、いや、あのね……そういうことじゃなくて、えっと、その……」

ああ、もう! 可愛く小首を傾げている彼女は、周囲から好奇の視線が絶え間なく浴びせられているのに気付いていないのだろうか。少し前にも書いたが、シルフィリアはハリウッド女優でさえ裸足で逃げ出すような超絶美少女である。まだ東洋人らしいアリエスとはともかく、次元を超えた美しさを誇るシリフィリアの容姿は、冒しがたい空気で駅前の大通りを完全に圧倒していた。そして、その彼女が今まさにアリエスの顔にかかった炭酸飲料を甲斐甲斐しく拭こうとしているのだ。

それ故、周囲の人々からアリエスに浴びせられる視線は、けして好奇のそれではなく、敵意が込められているように思えてならなかったのである。

(はあ……。これなら、まだレウルーラにいたほうがよっぽどマシだ……)

レウルーラでも、ベッドや温泉など“いかにも”という場所にお

いて、エロゲなら間違いなくイベントCGが用意されているようなハプニング騒動をやらかしているのだが、あっちはまだシルフィーと二人っきりだから良かった。

対して、この、ぐさっ！と突き刺さるような視線の数々を捌く術を残念ながらアリエスはまだ体得していなかった。

結局、自分のポケットから取り出したハンカチで顔を拭いたアリエスは、つまらなさそうにこっちを見ているシルフィーとなるべく目を合わせないようにしつつ、

「ええと、シルフィー……その、さっき途中まで話していた“世界を流離う鏡”の噂の続きは？ 危険を伴うとか言っていたけれど……」

そう尋ねると、シルフィーは嘆息混じりに頷いた。

「鏡の在り方は、ダムダムのそれと似ています。“記憶”というダムに、各地で写し取った情景を少しずつ蓄えていく……。そして、記憶が飽和する前に、誰かの所に現れ、蓄積していた情景を流し出すのです……」

「その周期が数百年に一度ってことか……」

「ええ……。しかし、問題は掃き出す情景の量です。高度に制御されて、少しずつ少しずつ流出させる分には大丈夫ですが、もし制御が壊れ、一度に大量の情景が溢れだしたら洪水を引き起こします……。いまのところ、そのような惨事は起きていないようですが、危険であることには変わりありません」

シルフィーの説明を聞きつつ、アリエスはあの青銀色のトンネルを思い出していた。

あれは架け橋というより、配水管のようなものだったということなのだろう。

「ちなみに、情景がすべて流出するのに約一日かかると言われています。なので、そう長く同じ場所にぐずぐずしてはいられません……。さあ、アリエス様。一日限りのデートを楽しみましょう！」

「……はい？」

デート開始

さて、半ば強制的に始まったデートであるが……。

(いきなり、デートと言われてもなあ……。どこに連れていけばいいんだろ……)

ここが見知った土地ならば、まだどうにかなるかもしれないが、いかんせん現在二人がいるのは人や車が頻繁に交差する大都会のど真ん中である。少し周りを見渡すだけでも、銀行、保険会社、家電量販店、コンビニ、ファーストフード店、ホテルなど、どう見てもデートに相応しくない建物ばかりであり、どうやら別の場所に移動したほうが良さそうだった。

少し考えた結果、アリエスはシルフィリアを連れて近くの書店へと向かった。

書店にならこの地域の情報誌が置いてあるに違いない、と判断してのことだった。駅の目の前で主人の帰りを待つ犬の銅像が、アリエスの幼い頃の記憶に引かかったような気がしたが、ひとまずはこの掻き分けられそうなほど粘着性のある熱気の塊から逃げるのが先決だ。

「シルフィー、暑くないかい？」

幅の広い道路を対角線に横断するスクランブル交差点の信号待ちをしている間、アリエスは傍らのシルフィリアに尋ねた。道行く人々はみな一様に暑さに顔をしかめ、ある者は日傘をさしたり、ある者は手にしたうちわを必死に扇いだりしている。

こうした日はこまめに水分補給や休憩をとらないと、熱中症に陥りやすいことをアリエスは知っていた。

しかしシルフィーは、茹だるような暑さなどまったく感じていない様子で、

「いえ、平気です。この程度の暑さは慣れればそれほど苦ではありませんし、どうにも我慢できない場合は私の周囲だけ適温に変える

こともできますから……」

そう。

シルフィーは膨大な魔力を秘めた兵器だ。その気になれば、この都市一つ消すくらい簡単にできるくらいのこと……。

しかし、その強大な力は彼女が自ら望んで得たものではない。

気が遠くなるような生体実験と薬物投与の繰り返しを経て得た禁忌の力……。

意志を持たず、そこらのモノ同然のように扱われていた頃の彼女……。

当時のことを思い出すだけで、アリエスは腸が煮え繰り返るような気分になる。

（あの頃の彼女は幸せというものをまったく知らずに生きていた。でも今は……この瞬間は……）

——彼女の笑顔を守りたい。

と、アリエスは強く思った。そのためにも、今日一日のデートを最高のものにしようと固く心に誓った。

書店で目的の情報誌を見つけるのにかなり時間を要すると思っていたが、予想とは裏腹にすぐに見つけることができた。

アリエスたちは知らなかったが、今日は日本時間の八月一日であり、世間では夏休みである。そのため旅行会社のパンフレットや、各地方の情報誌がまとめて置いてある専用のコーナーが書店に入っ
てすぐの所に設置されていたのだった。

その中から『ここを見なきゃ始まらない！？ 大満足の旅をかな
える一冊！ 関東周辺2010』という雑誌を手に取り、隣のシル
フィーにも見えるようにページを捲っていく。

「シルフィー、この中からどこか行きたい所はある？」

「……そうですね」

東京都心の各エリアが写真やイラスト付きで紹介されているペー
ジの上を彷徨っていたシルフィーの視線が、ぴたっとある一か所で

止まった。

(?)

彼女の視線の先を追っていくと、そこには――

秋葉原

と書かれている。そしてその下には、まったく自重する気配のないメイド姿の女性や、アニメのキャラクターがプリントされた紙袋を下げた若者などが奇妙極まりないポーズをしながらこちらに笑顔を向けている写真や、巨大なポスターが垂れ下がったCDショップ、アニメショップ、同人ショップの数々が紹介されていた……。

「アリエス様……」

と、こちらに期待の眼差しを向けてくるシルフィーに対し……

「よしっ！　シルフィー、良い子だから別の所にしよう！　それがいい！」

冷や汗を垂らしながら必死に抗議するアリエス。しかし、シルフィーは不満そうに頬を膨らませる。

「どうしてですか？　なんだかとても楽しそうな街に見えますが……」

“一部の人”にとってはね！

と、アリエスは心の中で声にならない叫び声を上げた。

何でこんなオタク街が紹介されてるんだよっ！　いや、確かに東京の見どころの一つなのかもしれないけどさ！　それにしたって“この雑誌”で紹介するような場所じゃねえだろ！　ここを見なきゃ始まらない！？　逆だろ！　ここを見たら、なんか色々と終わりそうだよ！　人として！

結局、アリエスの数十分にも及ぶ必死の説得により、次の目的地は鎌倉に決まった。

北条時宗ゆかりの地であり、四季の変化も肌で感じる事ができる古都である。比較的狭いエリアに見どころが集中しているのが特徴で、基本徒歩で見て回れるのが魅力的。観光の起点はJR横須賀線が通る北鎌倉駅か鎌倉駅となるが、長谷寺や鎌倉大仏などがある

長谷方面や、江の島を観光するなら全国的に人気の高い江ノ電を利用するという手もある。

一番のハイシーズンである六月のアジサイの時期は過ぎてしまっているが、懐石料理や甘味処で古都の雰囲気存分に味わうことはできる。

ただ、問題は渋谷から鎌倉までの距離で、ここから東急東横線で横浜まで出るのに約三十分、JR横須賀線に乗り換えてさらに二十分ほどかかってしまうのだ。

「シルフィー、やっぱり近場の別の場所にする？」

「いえ。この……」

シルフィーの細長い指がグルメやスイーツを紹介したページの上をすごいスピードで滑っていく。

「懐石セットや刺身セット定食、それからこっちの三色そばに小町団子、チョコクロツケ、ぴろしき、宇治白玉クリームあんみつ、あと三色しらす丼に紫イモアイス……」

最後にシルフィーは顔を引きつらせているアリエスに向き直り、「——を食べてみたいです！」

にこりと笑った。

「……もしかして、それ全部俺が奢るの……？」

「はい！」

アリエスは思わず頭を抱えた。なんだか急に頭痛を覚えたような気がした。

甘かった……。まさかデートがこんなに大変なものだとは知らなかった……。

脳内に再度現れたアスロックとミーティアが、『まあ、せいぜい悩み苦しみたまえよ、少年』と、まるで境地に至ったかのように話しかけてくるのをシャットアウトする。

ふっ、見てろよ！ 俺だってデートの一つや二つくらい……！

と意気込んだアリエスの決意は、渋谷駅の東急東横線ホームに着いた時点ですでに折れかかっていた。

「なんだ、この人込みは……」

ホームには一分の隙間もないくらいの人で溢れかえっていた。少し油断するとシルフィーとはぐれてしまいかねないので、アリエスはしっかり彼女と手を繋ぐ。

「何でこんなに人がいるんだよ……」

朝の通勤ラッシュの時間帯はとくに過ぎている。にも関わらず、これほどの混雑とは何かイベントでもあるのだろうか……？

そんなアリエスの疑問に答えるかのように、近くにいた子供がはしゃぎ声を上げた。

「ママ。楽しみだね！ 今日の花火大会！」

花火大会……？

「アリエス様……。真夏のイベント特集のページに記事が書かれていますよ」

「へえ……。どれどれ……」

神奈川新聞花火大会 2010年8月1日…横浜市西区

場所…東京都神奈川県横浜市西区横浜みなとみらい21地区臨港

パーク前面海上

営業時間…19…15…20…30（花火打ち上げ時間） ※荒

天の場合、2日に順延

みどころいっぱい！の神奈川新聞花火大会！

中でも必見なのは、関東ではなかなか見ることのできない『2尺玉』

直径480mの巨大花火が夜空を彩ります！

その他、スターマインを中心に約8,000発の花火を予定しています。

解説と共に、昨年の花火大会の様子が掲載されている。力強く、鮮やかに咲き乱れる夜空の花は、人々に一瞬の幻想を見せる。花火の爆発音、人々の感嘆の声が聞こえてきそうなほど写真はリアルの

一コマを正確に切り取っていた。

なるほど、これなら横浜方面に向かう公共交通機関が混雑するの
も頷ける。頷けるが……、

「シ、シ、シルフィー！！ もうちょっと離れることできない！？」

アリエスは先ほど乗車した満員電車の中で悲鳴を上げていた。

「無理です。こんなに大勢の客が乗っているのですから……。むしろ、もっとアリエス様に密着し……」

「わああああ！！ ちょ！！ それ以上はマジ勘弁してください

！！ お願ひします！！」

「？ なぜです？」

「いや、シルフィーの……そ、その……む、胸が当たっているから
……」

そう、さつきからシルフィーの恐ろしいほど柔らかい胸が、ムニ
ユツとアリエスの心臓を弄びまくっているのだった。満員電車では
仕方のないことなのだが、二人の距離は鼻と鼻がくつつきそうなほ
ど限りなくゼロ距離。髪からは女の子独特の甘い香りが漂い、彼女
のぽちちりとした大きな瞳が目の前にあって、口から洩れる吐息が
加わり……そして、ニッコリとどこか悪魔めいた笑顔を向けるシル
フィー。

嫌な予感がして後ずさろうか一瞬逡巡したときには、もうシルフ
イーはさらにアリエスに密着していた。

むにゅにゅ♪

ぎやああああああああああ！！！！

喉までせり上がってきた悲鳴をなんとか飲み下す。こういうシチ
ユエーションはレウルラのベッドで何度も体験済みなのだが、こ
の殺人的な破壊力だけは慣れで対処できるものではない。

「シ、シ、シ、シルフィー！！ ここは公共の場だから、できれば
帰ってからに……」

……あれ？ 俺、今おかしいこと口走らなかった？

「分かりました。帰ってからですね」

そして、何この子も嬉しそうな表情で頷いちやっているんでしょ……。

ともあれ、一旦離れてくれたため、なんとかアリエスの理性は死守された。

はあ……俺、今日一日無事に乗り切れるんだろうか……。

世界問わず、シルフィーに翻弄されるアリエスの胸中にはもくもくと暗雲が立ち込めていた。

古都鎌倉巡り（鎌倉大仏編）

そんなこんなで一時間後、二人は鎌倉駅に到着した。

このエリアは若宮大路を通り鶴岡八幡宮を目指すのが王道。参拝後は、小町通りに立ち寄って食事や買い物を楽しむこともできる。ちなみに、シルフィーが食べたいものリストに挙げた九つのうち、チョココロツケ、ぴろしき、小町団子はここで手に入れられる他、観光の中心地に相応しく、鎌倉みやげの名店も駅周辺に集中している。

とは言え、例の花火大会とみなとみらい周辺も観光したいというシルフィーの希望を叶えるには、少なくとも午後三時～四時くらいには横浜に戻ってなければならぬ。

加えて、しらす丼や紫イモアイスを食べるために、江の島まで行くことも考慮すると、あまり一エリアに時間をかけるわけにもいかないのだ。

そんな理由もあり、ここでは小町通りで食べ物を買うだけにし、鎌倉大仏と江の島をメインに観光することにした。

江ノ電鎌倉駅――。

予想通り、江ノ電もやはり混雑していたが、近寄りがたいシルフィーの容姿に人の波が左右に避けてくれたおかげでうまく海側の座席に座ることができた。

そして、鎌倉駅を出発して数分、シルフィーがぼつりと呟いた。

「この乗り物は、先ほどの電車と違ってずいぶんゆっくり走るのですね……」

見れば、民家の塀がかなり間近に迫っている。

「江ノ電は鎌倉と湘南藤沢をつなぐ名物電車ですからな。民家の軒先を走ったり、海沿いを走ったり、とある区間では路面電車にもなりますぞ」

シルフィーの隣に腰かけていた恰幅の良い老人が、微笑みながら

説明してくれた。年はもう70に届くだろうか。杖代わりの真っ白なステッキの上に両手をのせ、強い日差しをさけるためかこげ茶色の帽子を被っている。

長いときを生きてきた仙人のように、瞳には只者ならぬ光が宿っているように見えた。

「ええと、あなたは……？」

見たところ人は良さそうなのだが、それでもついつい警戒しがちになってしまいうアリエスに対し、老人は被っていた帽子を脱ぐと、

「おお、申し遅れました。わしは赤朽葉千之あかくちはせんじと言う者でございます。この年になると、なぜか旅心が頭をもたげましてな。今日は八王子からぶらりと出てきたのです」

淀みなく自己紹介する千之老人は、いっそ紳士と称しても差し支えないほど堂々とした風情だった。

「——ところで、その美しいお嬢さんは日本こくでは見慣れない容姿だが、ひょっとして外国の方かね？」

「ええ、そのようなものです。今日は一日、彼とデートを楽しむためにここへ……」

「ほお。それは、それは」

老人は、まるで自分の孫でも見るかのように目を細めて笑った。

「若いつて言うのはいいですなあ。わしもこう見えて昔は青臭くて……おっと、いや失礼。年を取ると、どうもおしゃべりになっていけませんな。——しかし、それならお二人方は、鎌倉は初めてですかな？」

「そうですね。鎌倉では大仏と江の島を観光したいと考えておりますが……」

「それならちよいどいい！ わしもこれから大仏様を拝みにいこうと考えていますな。よろしければ、色々と案内してさしあげますよ。これでも江ノ電と大仏様には詳しいほうですから……」

アリエスは老人には聞こえないほど小さな声で、

「どうする、シルフィー？」

「そうですね……。折角ですから、お言葉に甘えさせていただきましよう。こちらの世界の方との交流もきっと良い思い出になるでしょうから……」

シルフィーは老人に向き直ると、ニツコリと笑って、

「では、よろしくお願いします。千之様」

「まず江ノ電の醍醐味と言いましようか。それは区間によって、見える景色が絶えず変化するところにあります。例えば、これから向かおうとする長谷駅まではこのように民家の軒先をかすめるように進みます。しかし、そこから木々の間をすり抜け、稲村ヶ崎駅を越えた途端、目の前には日本でも有名な湘南の海が姿を現すのです！」

千之老人の語りは、まるでミュージカルのように声の抑揚が顕著で、聞く者を退屈させまいという気配りが随所に感じられた。

「湘南の海……ですか」

「ええ。それはたいそう綺麗に輝く海でしてな。夏になると多くのサーファーたちで賑わう湘南らしい風景を見ることができます。また稲村ヶ崎公園は、江の島はもちろん伊豆諸島の島影や富士山が見渡せる絶景スポットとして知られています。もともと、天気恵まれた日限定ですが、水平線に沈む夕日は多くの写真愛好家が思わずカメラを構えてしまうほど美しいと言われています」

「へえ……。お詳しいんですね」

雑誌の片隅にしか書かれていないようなことまでも熟知している千之老人に、アリエスは感心した声を上げる。

「老いた今となっては、旅だけが楽しみですから。なるべく多くの知識を仕入れておこうと思ひまして……おっと、長谷駅に着いたようですね」

江ノ電を下車したアリエスたちは、多くの観光客で賑わう長谷通りを歩き、高德院へと向かった。

高德院――。

古都鎌倉のシンボル、鎌倉大仏の名で知られる銅造阿弥陀如来像

が鎮座する有名なお寺である。大仏の完成時期は明らかになっていないが、ある史料に『建長4年「金銅八丈釈迦如来像」の鑄造を始めた』と記録されているのがこの大仏であると考えられている。災害により寺院は何度か形を変え、正徳2年に増上寺の祐天上人が建立した寺が現在の高德院となっている。

「うわ……実際に見るとかなり大きいんですね……」

シルフィーが大仏を見上げて目を丸くする。

空の下、訪れる観光客を迎えてくれる巨大な大仏様は、悠久の時を経てもなお荘厳にそびえる様子に造った者の確かな技巧と信仰が感じられる。

「ええ。建物に覆われていない露座の大仏は約11mですからな。

横幅は9・1m、全体の重さは121tにもなるんですぞ」

すっかりガイド役に馴染んでしまった千之老人は自身も大仏を見上げながら楽しそうに語る。彼の蘊蓄に魅了されたアリエスもまた、大仏に関する知識をどんどん吸収していった。

物語の途中ではあるが、鎌倉大仏の特徴として、いくつかトリビア的な内容をここでご紹介しよう。

- ・目……顔面に直接刻み込まれ、眼球は下向き。見上げて拝したとき、目が合うようになっていく。
- ・鼻……大仏像の鼻すじは額から通っている。鼻孔はあるが、真下から見上げないと見えない。
- ・口……東洋的微笑みと欧米人に言われている。口辺にはどの仏像にも見られる「ひげ」がある。
- ・百毫相……眉間にある白毛の右巻きのかたまり。仏はここから光を出して人を照らすと言われている。
- ・螺髪……小さな右巻きの巻貝状の毛が並んでいる。インドの釈迦の髪質を表しているとされている。
- ・肉髻……頭上に円盤状に盛り上がったふくらみ。悟りを開いた証とされ、仏の知恵が優れていることを象徴する。

・耳……顔の長さの半分以上を占めるほど、大きくて長い。鎌倉大仏の特徴ともいえる。

・山道……刻まれた三つのしわは、貪り、怒り、愚痴といった三つの煩惱を、悟りを開く際に断ち切ったことを表している。

・衣服……衣一枚のみを纏い、装飾具をつけていないことから、悟りを開いた仏であることを示している。

・手……仏の像の指間に必ずある、鳥の水かきのような網縵相もうまんそうが鎌倉大仏にもある。

「正式な参拝経路もご紹介しましょう」

1. 仁王門……境内の入り口にある門。仁王像が大仏様を守るように立っている。緑豊かな一帯では、野生のリスの姿を見ることができる。

← 2. 洗水舎……参拝する前に心と体を清めるための場所。まずひしゃくの水を左手に、次に右手、左手で溜めた水で口をすすいだ後、口を付けた左手をもう一度洗う。最後にひしゃくの柄を洗えば完了。

← 3. 鎌倉大仏……台座を含めた高さ13.35m、顔の大きさだけでも2.35mの巨大なご本尊さま。補修などがほとんどされておらず、造像当初の姿で残されていることや、鎌倉時代を代表する仏教彫刻であることが評価され、国宝にも指定されている。

← 4. 胎内拝観……拝観料とは別に20円を払えば、空洞になっている大仏内部を見学できる。金属の継ぎ目などがはっきりと見えて、鑄造の方法や当時の技術が感じられる。

← 5. 奉納大わらじ……座った大仏様がもし立ちあがったら……という想像のもと茨城県の小学生が造って奉納したわらじが境内に飾ら

れている。大きさはなんと2 mもある。

←

6. 与謝野晶子歌碑……与謝野晶子がこの地を訪れて詠んだ「鎌倉や みほとけなれど 釈迦牟尼は 美男におわす 夏木立かな」の歌碑が立つ。晶子は釈迦牟尼と詠んでいるが、これは間違いで、正しくは阿弥陀如来である。

←

7. 観月堂……大仏の裏手にある小さな堂は鎌倉三十三観音霊場二十三番札所で、聖観音像を安置している。朝鮮李朝の月宮殿を移築したもので、中世の朝鮮半島の建築様式を今に伝えている。

←

8. 大仏殿礎石……大仏殿に残された礎石や発掘調査などにより推測すると、横約44 m、縦約42.5 mの五間模裳階付だったと言われている。

約三十分の参拝経路をすべて巡り終わったアリエスたちは、売店に立ち寄った。大仏グッズを扱うほか、ソフトクリームやおでんといった軽食もあり、ちょっとした休憩にはもってこいの場所である。販売されている人気大仏グッズの中からシルフィーが喜びそうな品を見つけたアリエスは、それを二つ購入し、彼女のもとへと急いだ。

「シルフィー」

ソフトクリームを食べて休憩していた彼女の空いているほうの掌に、アリエスはそっとグッズの入っている小さな袋をのせた。

「？ これは……？」

「開けてごらん」

ソフトクリームを一旦アリエスに預け、シルフィーは袋の中身を確認する。そして、

「わあ…可愛らしい……！」

そこには愛くるしいベビーフェイスな大仏のキーホルダーが入っ

ていた。露座する大仏様は威厳を背負っているが、キーホルダーの大仏様はとても柔和な表情で、二人を温かく見守っているような気がした。

「ミニ大仏キーホルダーというグッズだよ。見た目も可愛らしいし、御守りにもなるんじゃないかと思ってね。ちょうど金色と銀色の二パターンがあったから、一つはシルフィーに、もう一つは自分用に買ってみたんだ」

「とっても嬉しいです！ ありがとうございます、アリエス様。でも……」

「うん？」

「いえ……この台詞は最後にとっておきましょう」

謎の言葉を残したまま、シルフィーは天使のような微笑みを浮かべるのだった。

「短い時間でしたけど、どうもありがとうございました。千之様のおかげで、とても楽しく大仏巡りをすることができました」

「いえいえ。わしの方こそ楽しかったですぞ。こんな年寄りの戯言に最後までお付き合い頂けて、なんと感謝したらいいか……」

高德院を後にし、場所は長谷通りと由比ヶ浜大通りがぶつかる交差点。これから長谷寺を巡る予定の千之老人とは、ここでお別れとなる。

「お二人の幸せがいつまでも続くことを心より願っておりますぞ」

「ありがとうございます。千之老人もお元気で」

信号が赤から青に変わった。

「では、これにて。運命が悪戯すれば、またお会いすることもありますでしょう」

去って行く千之老人の背中を見送りながら、アリエスはぼつりと呟いた。

「なんだか不思議な人だったね……」

「ええ……。もしかしたら、あの方は私たちが遠い異世界から来た旅人だってことに気付いていたのかもしれないね……」

二人の目の前を大柄な男が通り過ぎたときには、もう千之老人の背中は雑踏の中へ消えてしまっていた。それは、まるで長い夢から醒めたかのように……。

「さあ。次の目的地へ向かいましょう、アリエス様。もうお昼に近い時間ですし、そろそろお腹になにか入れたいところです」

「そうだね。江の島は新鮮な生シラスを使用した料理が有名みたいだし、お昼はそれにしようか」

再び長谷駅から江ノ電に乗車した二人は、信仰と観光で長年親しまれている島——江の島へと向かうのだった。

古都鎌倉巡り（江ノ島編）

「はい。アリエス様、あーん♪」

シルフィーがにこにこしながら、手に持った紫イモソフトクリームをアリエスの口元まで運んでくる。真夏だというのに二人の体はほぼ密着しているといって差し支えないくらいゼロ距離。ソフトクリームを持っていないほうのシルフィーの腕は、がちりとアリエスの右腕に絡められており、さらに付け加えるならシルフィーと反対側は壁になっていて退路なし。

そんな、傍から見ればリアル充実していると思えない二人を、遠くにいる（主に独身だと思われる）男性客が悔しそうな表情でにらみつけている。

えーと、こういう状況って“絶体絶命”とか“四面楚歌”とかって言うんだっけ……？

なんか違うような気もするが、アリエスの頭はパニックっていて回転能力が鈍くなっていた。

そうだ、とりあえず落ち着くために状況を再確認しよう。

鎌倉大仏参拝を終えた二人は、ここ——湘南のシンボル、江の島へとやってきた。到着したのは昼ごろで、ちょうどお腹の空腹具合とシルフィーの希望もあって、江の島で有名な生シラス丼を堪能することになった。

江の島弁天橋（本土から江の島へと通じる橋）を歩いていたときから、付近は家族連れやマリンスポーツ目当ての客たちでにぎわっていたが、島内の混雑はそれを遥かにしのぐものだった。

「さあさあ、お客さん！ 江の島名物『女夫まんじゅう』は一個95円！ 是非お土産に買って行ってちょうだい！」

「相模湾でとれた新鮮な魚介類を使用した料理はいかが！？」

「はい、弁天橋と岩屋を結ぶ遊覧船乗り場はこちらになりまーす

！」

「江の島に来たら是非紫イモコロッケは食べて行っておくれ！」

「あ！ あの抹茶アイス美味しそう！」

「どこから見て回ろっか？」

「あたし、江の島恋人の丘見てみたい」

「この辺は鷹が出るから、外で食べるときは気を付けてくれよ！」

「ほお。これが青銅の鳥居じゃな」

「元祖海苔ようかんを売ってる店ってどこだっけ？」

「えーっと、地図地図……」

「がいがいわやわや。子供からお年寄りまで、島の中心部にある江島神社まで続くメインストリートは多くの人でごった返していた。その活気あふれる光景に自然とアリエスとシルフィーのテンションも上がっていく。」

「さあ、アリエス様！ シラス井を出す店に寄って腹ごしらえしたら、いろんな所を見て回りましょう！」

そのまま青銅の鳥居をくぐろうとするシルフィーを、アリエスは慌てて呼びとめた。

「ちよつとシルフィー待った！」

「？ どうなされたのですか、アリエス様？」

渋谷でもそうだったが、やはりここでもシルフィーの並外れた容姿は存分に人目を引いていた。それは仕方のないことなのだろうけど、でもやっぱりシルフィーには今日くらいは普通の女の子のデートを楽しんでもらいたい。シルフィー本人は特に気にしているようには見えないけど、変に周りから注目されるのはやっぱり自然なデートとは言えない気がしてならなかったのだ。

アリエスは、ちょうど近くの店に売っていた可愛らしい帽子をシルフィーの頭にちょこんと被らせてあげた。

「えっと……アリエス様。この帽子は……？」

「うん。アウトドアって感じが出てすごく可愛いよ。これで少しは人目に付くこともなくなるだろうし、今日は陽射しが強いから紫

外線を防ぐ意味でもちようどいいし」

「あ……ありがとうございます」

「いいって。それじゃ、俺がお金を払っておくからシルフィーは隣の土産物屋でも見て回るといいかも。冷房も効いているし」

「ええ。では、そうすることにします」

とは言ったものの、レジで会計を済ましてから土産物屋を覗いてみると、そこにシルフィーの姿はなかった。

「参ったなあ……。また、どこかに隠れて俺の様子を窺っているんだろうか……」

渋谷に転移した直後、シルフィーにからかわれたことが脳裏に蘇ってきてアリエスは思わず頭を抱えた。

しかし予想に反して、シルフィーは意外にあっさり見つかった。

——『江の島アイランドスパ』と書かれた“温泉施設”の前で。

きらきらと瞳を輝かせて、その文字に心踊っている様子のシルフィーの横顔はとても幸せそうなのだが、彼女とは対照的にアリエスは疲れが汗と一緒にどっと噴き出してくるのを感じた。以前レウルーラで起こった、お風呂場ハプニングの記憶がアリエスの脳をかすめる。

いや、でもさすがのシルフィーも大勢の人がいる前ではくつついてこないだろう……多分。それに説明書きによれば、温泉は男女別々だっていうし。うん、めでたしめでたしだ。

「でも温泉プールエリアは、水着着用の男女共通エリアとなっていますが」

なにいいいいいい！！？

「アリエス様……。島を一巡りして汗をかいたら最後に一緒に入りますよ」

「い、いや、それだと、ほら、横浜巡りをする時間がなくなるとい
うか……」

あたふたするアリエスに対して、シルフィーは止めの一言。

「では横浜巡りより、アリエス様との温泉プールを楽しみたいです」

チ——ン……とアリエスの中で終了の鐘がむなしく響き渡った。

さてそれからだが、メインストリートの中ほどで一軒の料理店を見つけたアリエスとシルフィーは早速シラス丼を注文した。運ばれてきたものは至ってシンプルで、白飯を盛った丼の上にシラスを大量に乗せ、タレや醤油をかけただけであるが、“鮮度が命”のシラス丼はそれだけで充分に食欲をそそるものだった。

「うわあ……すごく美味しそう」

「生シラスは地元でしか味わえないからね。しっかり食べて帰って、この店を宣伝しておくれよ」

シラス丼を運んでくれた女性（おばちゃんではなく女性と表現するのがマナーというものだ）はとても気さくな人で、もっと一般的な釜揚げシラスと生シラスの違いなどを面白く語ってくれた。

「あんたたち江の島は初めてかい？ だったら是非『江の島展望灯台』と『江の島恋人の丘』は見ておいたほうがいいよ」

「恋人の丘……ですか？」

「そう、想い人同士で鳴らせば恋が必ず成就すると言われている、有名な“龍恋の鐘”があるところさ」

聞くとところによると、その昔、海に住んでいた邪悪な龍が島の天女に恋をしたことで改心し、天女と結ばれるという“天女と五頭龍”伝説にちなんだ鐘であるとのこと。この鐘を二人で手を取って鳴らせば恋が必ず成就するとかで、すぐそばのフェンスにはカップルの名前を書いた錠前がたくさん掛けられているという。

「あんたたちの恋が叶うように応援してるよ」

そう言ってウインクする女性（おばちゃんではなく女性）は、とても優しい表情だった。

「はあ……疲れたあ……」

「ほんと。今度からはエスカーを利用するようにしよう」

「おばあちゃん、おみくじやろう！」

「こら！ 走らないの！」

「辺津宮の境内の奉安殿には、日本三大弁財天のひとつ、“江の島の裸弁天”として知られる妙音弁財天が安置されております。この機会に是非ご覧になってみてください」

「失礼。この御祭神は？」

「あ、はい。御祭神は天照大神が須佐之男命と契約されたときに生まれた神で、三人姉妹の女神様です。この江の島ほぼ全域を境内とし、麓の辺津宮、中腹の中津宮、島先端近くの奥津宮に分けて祭神をまつっています」

新鮮な地元の幸を堪能したアリエスとシルフィーが次に向かった場所は、メインストリートを抜け、石段を上った先にある江島神社。緑が茂り、普段は静謐としていたであろうこの神社も、この時期は大勢の客とセミの大合唱によって騒がしかった。とはいえ、それは裏を返せば、江戸時代から庶民に愛されている信仰心が今もなお深くこの地に根付いている証でもあった。

さて、そんな信仰心溢れる神社に来てついやってみたくなくなってしまうものといえば……

「アリエス様。おみくじやりませんか？」

そう、シルフィーはさっきから、おみくじを手にして一喜一憂している観光客の様子をじい……っと眺めていたのだ。実のところ、アリエスはそこまでおみくじに書かれていることを鵜呑みにするような性格ではないのだが、それでも書かれている内容によって多少気持ちちが上下してしまうのは、やはり少しは信じているのかもしれない。

「それじゃあ、やってみよっか」

シルフィーの手を引き、早速挑戦してみる。

「よっ……と」

取り出した一枚のおみくじに書かれていた内容は……

おのが身を 修むる道は 学ばなむ しづがなりはひ 暇なくとも

運勢…どんな環境であっても、やるべきことは忘れず、常にやるようにしましょう。刺激的な出来事がありますが、あなた本来の役目を忘れてはなりません。名誉運あり。

恋愛…素晴らしい出会いが期待できます。また、愛する人と共に過ごせることに感謝できるでしょう。

学問…良いです。怠け心さえ起こさなければ、おおむね良い結果が出るでしょう。

アリエスの目にとまったのはもちろん恋愛欄。

愛する人と共に過ごせることに感謝……か。

ちらっとシルフィーのほうを見ると、彼女はアリエスにっこり微笑んで言った。

「この神社のおみくじはとても的確だと思いますよ。私も、アリエス様とこうして一緒にデートできることにとっても感謝していますから」

それは、なんの偽りもないシルフィーの本音。それが分かるだけに、アリエスは彼女のまっすぐ素直な言葉が少しくすぐったかった。もし、おみくじを引いていなくてもシルフィーはそう言うだろうと理解できたから。自分と一緒に過ごすことを心から幸せだと思ってくれているから。

アリエスは自然とシルフィーの手を強く握っていた。

「ああ、俺も感謝してるよ。さあ、“龍恋の鐘”を鳴らしにいこう」「はい！」

この繋がりをより確かなものとするために、二人は『江の島恋人の丘』に向けて歩き出した。

しかし……。

アリエスの胸中に微かに渦巻いている不穏な空気があった。あのおみくじの運勢の欄に書かれていた“刺激的な出来事”って一体何なんだろう……。

アリエスの表面上は笑顔でも、内心はなんとか温泉プールイベン

トを回避できないだろうか、ずっと考えを巡らせていた。

『江の島恋人の丘』は、島の入り口（江の島弁天橋）から見てほぼ反対側にあるため、そこまでは二十分くらい、レトロな雰囲気のお店が立ち並ぶ小道を歩くことになる。アリエスとシルフィーは時折気になった店を覗いたり、小道の隅で体を休めていた猫をなでたりしながら楽しく島の反対側を目指した。もちろん、途中で江の島のシンボル塔として知られる『江の島展望灯台』や、江の島のお土産ベスト1位に輝いている中村屋羊羹店の元祖海苔羊羹を買うことも忘れなかった。

そして――

広大な相模湾を臨む高台、昔から“鳴らすと永遠の愛を約束する”と伝えられてきた古びた鐘の音が大きく響き渡った。シルフィーをこれからもずっと愛すると誓う約束の鐘。もちろん特別何かが変わったわけではないけれど、この瞬間はラズライトに戻ってもきくと忘れることはないだろう――アリエスはそう確信した。

「なんだか少し照れくさいですね……」

鐘の余韻が響く中、シルフィーが頬をうつすらと染めて呟いた。その美しいセラミックホワイトの髪を海風がそつと撫でていった。

「でも、これでどんなことがあっても俺たちが離れることはないよ」

それは、かつての天女と五頭龍の恋伝説を信じた当地人たちの勝手な思い込みかもしれないけれど、フェンスにいくつも掛けられた想いの数はきつと彼らに幸せをもたらしたに違いない。そこに、また一つ――アリエスとシルフィーの想いを重ね、二人は『江の島恋人の丘』を後にした。

『江の島恋人の丘』から奥津宮を越えてさらに島の西南端まで進むと、“稚児ヶ淵”と呼ばれる、隆起現象で生まれた海食大地が広がっている。打ちよせては盛大に飛沫をまき散らす波、付近に漂う海風の匂い。今日は天気にも恵まれているため、広々い海の向こう

側には富士山の輪郭がくつきりと見てとれる。今はまだ昼間だが、夕方にはそれはもう見事な夕日を眺めることができるだろう。

で、そんな中――

「アリエス様、早く早く！」

すっかり、この壮大な絶景に夢中になってしまったシルフィーは、碎ける波を器用に避けながらどんどん海のほうへ近づいていく。

「ちょ！シルフィー、それ以上海に近づいたら危ないから！」

ただでさえ足元が波で滑りやすくなっているのに、シルフィーは半ばとび跳ねるようにして歩いている。そのままツルつと転倒してもおかしくない。最悪波に攫われてしまう可能性も……いや、シルフィーならその程度自力で脱出できるんだろうけど、そういう問題じゃなく傍から見て心臓に悪いのだ。

「ああ、もう！」

そうして、急いでシルフィーの傍まで移動したとき、

「きゃっ！」

案の定、シルフィーの体が一瞬傾いだ。一応想定していただけあって、アリエスの反応は速かった。さっと彼女の前方に移動して、その華奢な身体を受け止める。

「ほら、やっぱりこけたじゃないか。はしやぎたい気持ちは分かるけど、足元にはよく注意を払わないと」

「大丈夫ですよ。アリエス様なら絶対に私を受け止めてくれると信じていましたから」

「……ひょっとして、わざとこけたんじゃないよね？」

そういえば、さっきのシルフィーはややオーバーアクション気味だったような気も……。

「いいえ、そんなことするはずないじゃないですか。決してアリエス様に抱いてもらおうなんも……げふんげふん」

つまり抱いてもらいたかったんだろうな……。そのために一芝居演じるシルフィーは、とってもお茶目でもあった。

その後は稚児ヶ淵の奥にある海食洞窟、通称“江の島岩屋”をく
るっと一通り見て回ってから再び島の入り口まで戻って来た。それ
なりの時間が経ったはずだが、この辺りはまだ多くの観光客でにぎ
わっていた。

暑い中、数時間歩いたせいで少し疲れていたアリエスとシルフィ
ーは、とてもおいしいと評判の紫イモソフトクリームを食べることに
決めたのだが……シルフィーはなぜか一つしか注文せず、よく分
からないまま冒頭部分で述べたように修羅場っているわけだ。ここ
までの長い回想にお付き合いくださった読者のみなさま、ほん
とお疲れ様でした。

——で、この状況はナンダ？

「ええと、シルフィーさん？　もう少し離れていただけるとありが
たいんですが……」

「そうしたら日向に出してしまうじゃないですか。むしろアリエス様
がもう少し詰めてくださると私も完全に日陰に入れているのですが」
「そ、そういうことならお互いの場所を入れ替えよう！　俺なら日
向に出ても構わないから……」

「場所を入れ替えたならアリエス様逃げちゃうじゃないですか。だか
ら、このままでもいいんです」

「良くないよ！？　周りの人からすっごい敵意のこもった視線が注
がれているんだけど！」

「そんなことより早くアイス食べないと溶けてしまいますよ？　は
い、あーん♪」

「……自分で食べます」

「なにをおっしゃるのですか。デートの定番じゃないですか」
「定番化してるの！？」

外野に助けを求めたいところだが、久しぶりに脳内に現れたアス
ロックとミーティアはにやにやしながらアリエスを見守るだけだっ
た。ちくしょう、あいつら今度あったら覚えてろ……！

仕方なく、アリエスはシルフィーの差し出したソフトクリームを

舐める。途端に冷たい刺激が脳に届き、思考が少しクリアになった。それほど、紫イモソフトクリームはおいしかったのだ。

「アリエス様……。口の周りにアイスが少しついていきますので、拭き取ってさしあげましょう」

「え？ いや、それはさすがに自分でやるから……！」

しかし、慌ててポケットに手をつ突っ込んでみるも、そこにあるはずのハンカチは忽然と消えていた。なぜだ……。

「見つからないようですので私がやります。じっとしててくださいね」

脳内で笑いを噛み殺しているアスロックとミーティアには謹んでご退場してもらい、アリエスは努めて冷静な表情を保つのに必死だった。

「はい、終わりました」

「あ、ありがとう……」

「いえいえ、この程度は前座に過ぎません。後にはもっと大きな楽しみが控えているのですから……」

シルフィーの視線を追っていくと、そこには数時間前に見た『江の島アイランドスパ』——天然温泉が楽しめる日帰り温泉施設があった。

やっぱり行くのか……。

温泉イベントを回避できなかったアリエスの頭の中には、おみくじに書かれていた“刺激な出来事”の六文字がネオンサインに彩られて派手に輝いていた……。

さて、結果から言ってしまうと。

プールエリアには海だけが目の前に広がる滝泉、神秘的な雰囲気がある洞窟泉、トルマリン石が足を刺激するトルマリン泉など、趣向を凝らしたプールが揃っていたのだが、アリエスにはそれらの趣を楽しむ余裕がどこにもなかったと書けば、勘のいい読者はある程度想像がつくのではないだろうか。

男女共通エリアだけあって、それなりにカップルの姿もいたのだが、シルフィーはどずずとアリエスにぴったりくっついていた女性はいないだろう。シルフィーの肌の温もりからひと時も逃れられなかったアリエスの魂は、少し気を抜けばふらふらとどこかへ飛んで行っていたかもしれない。

いや、もちろんプールなので水着着用なのだが、それがまた一段とシルフィーの完璧なボディラインを強調しているというか何と云うか……とにかく健康な青年には刺激が強すぎるのだ（アリエスは一応慣れ？ ているからいいとして、近くにいた別の男性観光客はシルフィーの艶めかしいラインを見て鼻血を迸らせていた）。

よく天国と地獄は紙一重だって聞くけど、この一時間ほどがまさにそんな状況だった。

で、ようやくプールエリアから解放され、ちょうど温泉施設のすぐ外で売っていた紫イモコロッケを食べているうちに、いつのまにか辺りの暑さは和らいでいた。

時計を確認すると、もうすぐ五時になるうとしている。花火大会に余裕を持って間に合うためには、そろそろ横浜まで戻っておいたほうがいいだろう。

「そろそろ出発しようか、シルフィー」

「そうですね。思いがけず長居してしまいましたし……ただ——」
「うん？」

「このまま花火大会の会場に向かう前に、もう一か所だけ寄り道してもいいでしょうか？」

「？ まあ、横浜から遠くない場所だったら大丈夫だと思うけど……なんで？」

「それは秘密です♪」

どうやらまた何か思いついたのだろう、シルフィーは子供っぽく無邪気に笑った。

アリエスがその笑顔を見るときは、大抵ろくでもないことが起こる兆しなのだが、さきほどの“刺激的な出来事”もあり、“もうど

うにでもなれ、こんちくしょう!”と、ある意味肝が据わっていた。
「分かった。じゃあ、少し寄り道してから花火大会に向かうとする
か」

「はい♪」

立ちあがったアリエスの腕に、すぐさま自分の腕を絡ませるシル
フィー。

今日一日で、この状態にもだいぶ慣れてきたアリエスは、“ま、
たまにはこうして歩くのもいいかな”と心の中で呟き、優しい微笑
みを浮かべた。

そうして二人は江の島を後にし、デートの最後の舞台——横浜『
みなとみらい21地区』へと向かうのだった。

フィナーレ

日没も迫り、あたりが黄昏色に染まり始めた午後五時半すぎ。

アリエスとシルフィーは横浜市の中心部、横浜駅へと戻ってきていた。花火大会が始まるのは午後七時十五分から。みなとみらい地区へは、ここからみなとみらい線に乗れば十分とかからず着く距離である……のだが。

「人混み、すごいことになってますね……」

シルフィーが呟いた通り、あらゆる改札口から凄まじい数の人が断続的に吐き出され続けている。おそらく帰宅ラッシュと花火大会の影響だろう、駅の西口と東口を繋ぐもっとも大きな連絡通路でさえ、ほとんど隙間が見当たらない。ちよつとでも油断すると人の流れに呑み込まれてしまいそうになる。

「シルフィー、俺の手を絶対に離すなよ」

押し合いへしあいの大混乱にも負けず、アリエスはシルフィーの手を引っ張って駅の東口へと目指す。どういう意図なのかはまだ教えてくれないが、シルフィーの言った”寄り道”というのが、横浜駅の東口付近にある大型デパートだったのだ。

もはやパレードかなにかあるのではないか、と思うほど歩道にずらりと列を作って移動する人たちを避けつつ、なんとかデパートに辿り着いた。デパート内は空調が効いていて、外の蒸し暑さと異常な熱気で火照った体を冷ますのにちょうどよかった。

ようやく一息ついたアリエスは、シルフィーに向き直ってたずねた。

「それでシルフィー。ここで見たいものってなに？」

「えっと、ですね……。アリエス様、最初に書店で買った情報誌持っていますか？」

「あ、うん。ええと……これだね」

おそらく該当ページを覚えていたのだろう、シルフィーはすぐに

横浜駅周辺の施設やグルメを紹介するページを開くと、見開きいっぱいに書かれている文字を指さした。

「この”デパ地下”という場所に行ってみたかったです」

「ああ、なるほど」

確かにデパ地下に憧れるお姫様や令嬢は多いとは聞くけど、シルフィーも一度行ってみたかったんだな。特にこのデパートの地下二階の食料品売り場には、2400坪もの広大なスペースに約160もの店が構えているらしい。ラズライトでも見たことのない、とても美味しそうな和・洋菓子の数々にシルフィーが心惹かれたのも無理ないのかもしれない。

「と言うわけで、早速地下へまいりましょう、アリエス様！」

「ちょ、シルフィー、引っ張らないで！」

興奮を抑えきれない様子のシルフィーに急かされ、アリエスは転びそうになりながら彼女のあとについていく。エスカレータで地下二階に下りると、そこは威勢のいい声があちこちから飛び交い、スイーツのほのかに甘い匂いが漂う、まさに食の中心地とも言える場所だった。

「さあ、お客さん！ 横浜発祥と言われる”西洋煉瓦”を模したフオンドンシヨコの濃厚な味わいを是非試食していただくれ！」

「地下二階クッキングステーションでは料理講座を随時開催しております。興味がありましたら是非お立ち寄りください」

「日本全国の銘菓が揃う、”諸国銘菓 卯花牆”はこちら！ 湘南で盛んなサーフィンのサーフボードをかたどったサブレも大人気！」

江の島でもそうだったが、活気あふれる所ではついつい色んなものを見てしまいたくなる。しかし、花火大会までの時間が迫っていることも考えると、ここのオススメのスイーツあたりをピンポイントで試食していくのがいいだろう。

アリエスは食品売りの入り口付近にいた若いデパ地下スタッフに声をかけた。

「あの、すみません」

北海道の新鮮な生クリームをふんだんに使用した、なめらかな食感が口の中に広がる。心身ともに少し疲れ気味のアリエスには一段と美味しく感じられたのだ。

「あれ、シルフィーは食べないの？」

「いいえ、もちろん食べますとも。ですが、今度はアリエス様の番ですよ」

「えーっと、俺の番ってどういうこと……？」

「さつき私がアリエス様にやったことを今度はアリエス様が私にや
ってください」

……ってことは。

「……まさか、俺がシルフィーに”デートの定番”とやらをやるの？」

「もちろんです。私ばかりだと平等じゃないじゃないですか」

ええええええええええ！！？

一応フロアの隅っこにあるベンチに腰かけているとはいえ、こんな大勢の人がいるデパ地下でシルフィーに「はい、あーん」とかやるのめっちゃ恥ずかしいんだけど……！！

「なに恥ずかしがっているのですか。恋人同士では当たり前だと聞きましたよ？」

「だれに!？」

「アスロツク様とミーティア様です」

その名前が飛び出した瞬間、アリエスの顔は無理やり苦い漢方薬を飲まされたような表情だっただろう。あいつら、そうまでして俺を笑いたいのか……！

「さあ、アリエス様早く。急がないと花火大会が始まってしまいま

すよ」

ああ、もう分かったよ、こんちくしょう！

アリエスはビーカーとスプーンを構えると、にこにこしているシルフィーに、

「はい、シルフィー。あーん」

としたのだが……

「却下です。アリエス様、もうちょっと楽しそうな雰囲気でテイク2いきましよう」

「ちょっと待って！ 今のどこがおかしかった!？」

「大雑把に考えて、改善点が三つあります。一つ目、笑顔を崩さないようにすること。二つ目、『あーん』の部分は『あー←ん』ではなく、『あー→ん』です」

知らないよ!! そう思わず口走りそうになったが、細かいイントネーションまでご指導してくださるシルフィーさんの目が限りなく厳しいのを見て咄嗟に飲み込んだ。

「そして三つ目、『あーん』の最後には♪をつけましょう」

「どうやって!？ けっこう難しくない、それ!？」

「できないではなく、やらなければならないんです」

無茶苦茶な注文を要求するシルフィーさんの目はやはり厳しい。

えっと、このデートの趣旨ってなんだったつけ……? そんなことを考えながら回数を重ね、テイク8くらいで、

「はい、シルフィー、あーん♪」

「合格です。これでまたひとつスキルが身に付きましたね、アリエス様」

と、ようやくOKが出たが、アリエスは疲れがどつとでてくるのを感じた。

デートってこんなに大変なんだな……。

さて、無事? デパ地下巡りも終わり、そろそろ「みなとみらい2
1」地区へ出かけようとデパートの出口へ向かおうとしたのだが――

「アリエス様……。たびたび引きとめて申し訳ありませんが、少しの間待っていていただけるとでしょうか？」

「うん？ あ、もしかしてお手洗い？ 花火大会の会場は混雑していて身動きが取れないだろうから、お手洗いなら先に行っておいたほうがいいよ」

「いえ、そうではなく……。実はここに来た目的はもうひとつありまして」

「ほかにも見たいものが？ うーん、でも時間がないし、今回は諦めたほうg……」

「お願いします、アリエス様。どうしてもアリエス様にお見せしたいものなんです」

「……って、へ？ 俺に見せる？」

「はい。ですから少しだけ待っていてください」

「俺も一緒について行っちゃ駄目なの？」

「それは駄目です！ アリエス様をびっくりさせることが目的なんですから」

シルフィーの顔は真剣だ。ってか、俺をびっくりさせる、って……これ以上なにが飛び出してくるというんだ……。想像がつかないだけに、アリエスはややげんなりする。

しかし、シルフィーはにっこりと微笑んで、

「大丈夫ですよ。見ればきつと元気になるものですから」

と謎の言葉を残して、エスカレーターで上の階へのぼっていった。

「元気になるもの、ね……」

シルフィーがいない間暇なので、アリエスは独自で推理してみるが、どうしてもこれまでの様々なハプニングが変にフィルタをかけるせいで、どうしても想像が”そっち”方面にいつてしまいがちになってしまう。

「あああああ！！ なに考えてんだ俺は！！」

周囲に迷惑をかけないよう、アリエスは小声で絶叫する。しかし、ときに頭を抱え、ときにニヤつくアリエスの様子は周りからすれば

かなりアブナイ人のように映っていたのだが、そのことを本人は知る由もなかった。

「くそ！ 止めだ止め！」

どうにもならなくなり、アリエスは強制的に思考をストップさせた。そもそもシルフィーは俺を驚かすことが目的みたいだし、あれこれ予想しないほうが素直なりアクションを返せるだろう。

推理を諦めたアリエスは例の地域情報誌を取り出した。これから「みなとみらい21」地区に向かうに当たって、現地の地理や花火大会の情報をもう一度復習しておこうと思ったからだ。読者のみなさんのためにもこのへんで横浜港周辺の有名なエリアを紹介しておこう。

まず、横浜において一般に雑誌でよく取り上げられるエリアといったら、次の四つだろう。

”みなとみらい21”、”関内・馬車道”、”山下公園・大栈橋”、”横浜中華街”。

神奈川新聞花火大会は、”みなとみらい21”地区の中でも、もつとも海に面した臨港パークで打ち上げられる。関東では珍しい二尺玉も打ち上げられる夏の風物詩のひとつなだけあって、8月は実に520万人もの観光客が訪れるらしい。

「どうりであんなに混みあっていたわけだ……」

半ば戦場と化していた駅構内の様子を思い返し、アリエスはそつと嘆息する。このシーズンはあちこちで交通が規制され、周辺の路上や公園の敷地、さらにはちょっとした連絡通路まで、花火が見える箇所のほぼすべてが”満員状態”になるという。

「ってことは、今から”みなとみらい”に向かってても花火がよく見えるポジションはだれかに盗られている可能性があるってことか」

うーん、とアリエスは難しい顔をして考え込む。

折角の花火大会なんだし、シルフィーにはちゃんと見せてあげたいんだよなあ。建物の影からちらっと見える程度じゃ、やっぱり来た意味がないし……。でも、だからと言って、こんな大勢の人が詰

めかける場所に穴場なんてあるわけ――

「――いや、”ここ”ならもしかしたら……」

アリエスの目が花火大会とはまったく関係ない記事の上で止まった。そしてその記事の隅々まで読んで、内容を頭に叩き込む。最後に、これからの行動のシミュレーション。

「うん。これならシルフィーを満足させてあげられるかもしれない」と、そのとき。思わず笑みがこぼれたアリエスの背後からシルフィーの声が投げかけられた。

「アリエス様。大変お待たせして申し訳ありません」

「いや、気にしなくていいよ。俺もちょうど考え事していたところだし……」

シルフィーのほうへ振り返ったアリエスの言葉が途切れる。なぜなら、シルフィーは……

「どうでしょう、アリエス様……。この浴衣似合うと思いますか？」少し照れくさそうにくるりとその場で回って見せ、アリエスに感想を求める。

そう、シルフィーは一転して色鮮やかな浴衣をその肢体に纏っていたのだった。古くからの伝統を受け継いできた有松絞りの浴衣は、この日シルフィーに着用してもらうために生み出されたのではないか、という根拠のない妄想が自然に浮かんでくるほどより一層輝きを放っているように見えた。またシルフィー本人も、髪型をアップスタイルのまとめ髪に変えており、まさに浴衣美人といった風情だった。その美しさたるや、男性だけでなく女性も思わず振り返ってしまうに違いない。

そして当然ながら、アリエスのドギマギ感も半端なかった。

え？ え？ もしかして俺に見せたいものって、この浴衣姿だったってこと？ ちょ、いや、いきなり浴衣姿で目の前に立たれても……でも、やばい、これは冗談抜きでマジで可愛い……。

「似合わない……でしょうか？」

やや伏し目がちに再度訊ねてくるシルフィーに、アリエスは首が

もげそうな勢いでぶるんぶるんと左右に振った。

「いや、その逆!! 似合いすぎてて、なんといったらいいか……なんかもう別次元の美しさだというか……。とにかく、すっごく可愛いわ!!」

「そうですか……。良かった、アリエス様に喜んでもらえて……」

シルフィーは、ほっと安堵の微笑みを浮かべた。その笑顔に、まともやドキンッ!と心臓が跳ね上がるアリエス。シルフィーをずっと見つめ続けていると、あまりの可愛さに思考が正常に働いてくれないので、彼女からやや目を逸らしつつアリエスはたずねる。

「でもシルフィー、その浴衣は一体どこで？」

「このデパートの六階の呉服売り場で、ゆかたセンターという催し物をやっていました、そこで購入したんです。もっとも、女性用がほとんどで男性用がなかったのが残念ですが……」

「い、いや、俺はいいよ! お金も余裕がないし……って、そんなことより、シルフィー今から急いで駅に引き返すよ!」

「え? あ、はい!」

シルフィーの手を取って、急ぎ足で横浜駅まで引き返す。花火大会の開始は午後七時十五分。しかし、アリエスがこれから向かうとしている場所にはもっと早く着いておかねばならないのだ。

ぎりぎり、かな……。今からだと分刻み、あるいは秒刻みの戦いになるかもしれない。

みなとみない線のホームに駆け込んだのと同時に到着した電車に素早く乗車する。予想はできていたが、車内はまさに鮎詰め状態だった。はつきり言って、朝の東急東横線のほうがまだマシだと思えるくらいひどい。四方八方から人に押され、アリエスとシルフィーはお互いに密着状態になる。そして密着ということは必然的に――むにゅ♪とシルフィーの胸がアリエスの心臓を弄ぶ。

ぎゃあああああああああ!……!! つか朝の満員電車の中でも同じことあったような気がするんだけど、どんだけこの展開好きなんだ作者あああああああ!……!!

しかも朝と違うところは、シルフィーの服装が生地が薄く開放的な浴衣になっていることで、その……シルフィーの白い肌が間近に……。

って、だからなに考えてんだ俺はああああああああああ
!!!!!!

と、とにかく！　ほんの十分くらいなんだ！　十分耐えれば……
シルフィー肌きれいだなあ……。

「アリエス様……。そんなにジロジロ見られると、少し照れくさいです」

うわああああああ、俺の馬鹿ああああああああ！！！！
健全な青年であるアリエスにとって、欲望を無視することはとても難しいことだった。

日本大通り駅で下車して地上に出ると、もはや歩道と路上の区別がつかないほどの人が集まっていた。

「シルフィー、こっちこっち」

アリエスは努めてシルフィーが人波に吞まれないように注意しながら、大栈橋へと移動する。時計を確認すると午後六時二十分を少し過ぎたところだった。

「ふうー、なんとか間に合いそうだな」

「どこかお薦めスポットでもあるのですか？　見たところ、どこもかしこも人で溢れかえっていますが……」

「それがあるんだなー。ほら、あれだよ」

アリエスが指したのは、”ロイヤルウイング”と書かれたクルーズ船だった。”YOKOHAMAベイクルーズ”とも呼ばれていて、横浜ベイブリッジやみなとみらいを約一時間半から二時間ほどかけて巡る、小さな船旅サービスである。また本格中華料理や趣向を凝らしたエンターテイメントを楽しむことのできるレストラン船でもあり、船内ではクラシックやジャズの生演奏を聞けるほか、スタッフとの会話も楽しめるバルーンアートやテーブルマジックなど

も披露される。

アリエスがシルフィーを待っている間、立てた計画はこれだった。すなわち、陸上が混雑しているのなら海上から花火を見ればいいと思ったのだ。しかもこの日は特別に”みなとみらい 神奈川新聞花火大会クルーズ”という特別便が運航しているのだ。

本来は予約制なのだが、そこはシルフィーの魔術でうまくごまかして無事乗船できた。ちよつとずるしてしまったけど、きちんと乗船料は払ったし、そこは目をつぶってもらおう。

早速デッキに上がってみると、すでに数人の客がこれから始まる花火大会に顔を上気させ、興奮を隠せない様子で語り合っていた。

「なるほど……ここなら視界を遮るものが何もなくいいですね。海風も心地いいですし」

「そうだね。陸のほうは相変わらず凄いことになってるけど……」

あの大量に蠢く黒い豆粒みたいなもののひとつひとつが人だと思うと、末恐ろしいというかある意味不気味な光景だった。が、逆に海はどこまでも静かだった。それは嵐の前の静けさに似ている。まるで夜空を染め上げる派手なショーを前に、じっと息を潜めているかのようだった。

「夜景、きれいですね……」

シルフィーが心奪われた様子でぼつりと呟く。

発展を続ける近代都市と、どこかレトロな港が織りなす壮大かつ幻想的な夜景——。ランドマークタワー、クイーズスクエアなど、みなとみらいの巨大なビル群の見事な色彩バランスとは対照的に、昔の面影を残す赤レンガ倉庫は夜の空間に儚く幻想的に浮かび上がっている。かつて鉄道が走っていた気車道では、レール跡に残された淡い光がまるで今も人々を導くかのように輝いている。新旧一体となった横浜港のイルミネーションは海面で反射し、ゆらゆらと絶えず変化を繰り返していた。

「来て良かった？」

「ええ、とっても……」

優しい表情で頷くシルフィーの横顔に、アリエスはしばし見とれてしまう。

しかし数分後、唐突に響き渡ったドーンッ！という花火の打ち上げ音によってアリエスの意識は現実に戻された。

「お。花火大会始まったみたいだね」

シルフィーは答えなかった。夜空に咲き乱れる色とりどりの花に目を奪われている。市民の協力によって打ち上げる”市民の花火”、子供たちから募集した絵画をもとに制作した”夢の花火”、連続して打ち上げられ虹色の幻想を大音響と共に描き出す”大スターマイン”。そして、関東の目玉——直径約480mにも及ぶ二尺玉が一際高い空に破裂したとき、シルフィーが静かに切り出した。

「アリエス様……。鎌倉大仏の参拝を終えたあと、私が言いかけた言葉を覚えていらっしゃいますか？」

「言いかけた言葉……？」

アリエスは記憶を探る。あれは確か俺がシルフィーにミニ大仏キーホルダーを買ってあげた時のこと、だよな。

”とっても嬉しいです！ ありがとうございます、アリエス様。でも……”

”うん？”

”いえ……この台詞は最後にとっておきましょう”

「アリエス様……。私は——アリエス様と一緒にいるだけでとっても幸せなんですよ」

そしてアリエスの頬でチュッという音がした。

え？

「これは今日のささやかなお礼です」

え？ え！？ ちょ、今のって……！

しかし、それ以上アリエスは考えることができなかった。例の青と銀色の不思議な光の粒が周辺に渦巻き始め、景色が急激に遠ざかっていく。まるでとてもなく大きな重力に背中から引っ張られているような感覚だった。踏ん張ろうとしても手足は動かず、成す術

も無く光の奔流に呑み込まれていく。

「どうやら時間のようですね……。アリエス様、最後にもう一度お札を言います。今日のデートを私は一生忘れないでしょう。そして、これからもよろしく願います」

シルフィーの言葉が頭の中にぼんやりと響き渡る。だが、それも次第に遠ざかり——アリエスは氣を失った。

おかえり、おかえり、お嬢さん。

一日限りの記憶の旅

満足してもらえたかな？

そうか、そうか、そいつはよかった。

ならば我はもう行こう。

次の未知なる世界へと。

新たな客人の所へと。

その思い出をいつまでも大切に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8841t/>

鏡の国のデートコース

2011年6月6日22時40分発行